

聖書：ヨハネの黙示録 21：15～21

説教題：あらゆる宝石で飾られ

日時：2021年10月31日（朝拝）

今読んでいる黙示録 21 章は、最後の審判が行われた後の新しい天と新しい地について述べています。最初の 1～8 節までで全体的なことについて語った後、9 節からより詳しく記すという構成になっています。前回は 9～14 節までを見ました。御使いの一人が来てヨハネに「ここに来なさい。あなたに子羊の妻である花嫁を見せましょう」と言った後、彼を大きな高い山に連れて行き、聖なる都エルサレムが神のみもとから降って来る様子を見せました。この聖なる都エルサレムとは花嫁なる教会のことです。まず遠くから見た最初の光景が 11～14 節に記されました。都には神の栄光があったこと、その輝きは最高の宝石に似ていたこと、その都には高い城壁や 12 の門、12 の土台石があったこと・・・等について。そして今日の 15～21 節でさらに近くに寄って都の様子が描かれます。ここに記されるのは大きく二つのことで、一つはこの都の寸法あるいは測量に関する事、もう一つはこの都の材料に関する事です。

最初に記されるのは、この都の寸法あるいは測量に関する事です。15 節で御使いは金の測り竿を持っていました。「測り竿」は 11 章 1 節にも出て来ました。そこではヨハネに杖のような測り竿が与えられて、神から「立って、神の神殿と祭壇と、そこで礼拝している人々を測りなさい」との指示がありました。これは神が教会のことをよく知っておられ、心にかけていてくださること、そしてこれを配慮し守ってくださるというメッセージを伝えるものでした。今日の箇所測り竿も基本的には同じです。ただしかつてヨハネに測れ！と言われたのは地上の教会だったのに対して、今日の箇所で測られるのは将来の最終状態に達した教会です。ここでは御使いがこの測量をします。最終的な教会の素晴らしさは人間の手で測れるレベルものではないということでしょうか。また今回の測り竿は「金」でした。この後、この都の描写として「金」がたびたび出て来ます。18 節：「都は透き通ったガラスに似た純金できていた。」 21 節：「都の大通りは純金で、透明なガラスのようであった。」このような新しいエルサレムを測るのにふさわしい道具として、御使いが持っていたのは「金」の測り竿だったのでしょう。神はこうしてやがての教会のこともすべてご存知であり、ご自身の完全な守りと祝福のもとに置いてくださることがこのことに示されています。

その具体的な寸法が 16 節以降にあります。都は四角形で、長さと同幅でした。御使いがその竿で測ると一辺は 12,000 スタディオンありました。欄外の 16 に「1 スタディオンは約 185 メートル」とありますので、12,000 をかけて計算しますと 2,220 km になります。東京から九州までが約 1,000 km であることを考えると、2,220 km は日本全部が余裕ですっぽり入るくらいの大きさになるのでしょうか。ある学者はこれは当時のいわゆる地中海世界において考えられる世界の大きさに匹敵すると言っています。具体的にエルサレムからローマまでの距離に相当します。とするとやがての新しいエルサレムはユダヤのエルサレムばかりでなく、全世界に住むすべての信じる異邦人たちも十分に含み得る都であるというイメージを持つものだったのでしょうか。しかし私たちは必要以上には文字にこだわらず、黙示録は象徴的表現で書かれていることを絶えず思い起こすべきです。12,000 という数字は $12 \times 1,000$ です。12 という数字は特別な意味を持って使われて来ました。前回の箇所でも 12 部族や 12 使徒と出て来た通り、いずれも神の民と関係する数字です。その 12 に 1,000 がかけられています。1,000 は 10 の三乗で「たくさん」の意味を持ちます。ですからこの 12,000 スタディオンという数字は、神の民を表すこの都の巨大さ・広大さを示そうとしたものでしょう。そして注目すべきは長さと同幅だけでなく、高さも同じであると言われていることです。つまり一辺 12,000 スタディオンの「立方体」ということになります。これは何を意味するのでしょうか。三辺が同じ長さの立方体で思い起こされるのは神殿の至聖所です。列王記第一 6 章 20 節：「内殿の内部は、長さ二十キュビト、幅二十キュビト、高さ二十キュビトで・・・」。至聖所に入れるのは大祭司一人であり、しかも年に一度の贖いの日だけでした。それに対して新しいエルサレムはこの巨大な都全体が至聖所となることをこれは暗示するのではないのでしょうか。一見、一辺 12,000 スタディオンの立方体と言われると、新しいエルサレムは角ばっていて、数学的・機械的で、未来的・宇宙的な都市なのかというイメージを持つかもしれませんが、言いたいことは神とのこれ以上ない親しい交わりの世界であるということです。都全部が神と直接お会いし、神の最大の祝福のもとにある、あの神殿の一番奥の部屋に相当するような世界であるということです。

また 17 節に城壁を測ると 144 ペキスあったとあります。欄外の 17 に 1 ペキスは約 44 センチメートルとありますので、こちらを計算すると 63.36 メートルになります。今日で言えば 20 階前後の建物の高さとなるのでしょうか。それなりに大きいとも言え

ますが、先に見た通り都の高さが 2,220 km という途方もない高さであることを考えると、この城壁はあまりに低すぎて釣り合わないということにもなります。そこでこの 144 ペキスは城壁の高さではなく、城壁の厚さではないかと言う人もいます。しかし先に見たように、これらの数字はあくまで象徴的表現です。17 節後半に「これは人間の尺度であるが、御使いの尺度も同じであった」とあります。少し分かりにくい言葉ですが、これはこの数字自体は人間と御使いの世界とで共通ではあるが、だからと言って人間世界の考え方で捉えてはならないこと、御使いの世界の考え方で考えられなければならないことを示唆しているように思われます。つまり字義的に取ってはならない、象徴的に理解しなければならないということです。144 という数字もどこかで見た数字かと思います。これは 12×12 で黙示録 7 章 4 節で神の民全体を表す数字として出て来た 144,000 人を思い起こさせます。12×12 とは 12 を二乗して強調したもののか、あるいは旧約のイスラエル 12 部族と新約の 12 使徒をかけ合わせたものでしょう。ですからこの城壁は神の民を特徴づけるものであり、また神の民を確実に守る神の守りを象徴するということなのでしょう。

さて後半 18 節以降は都の材料についてです。まず「都の城壁は碧玉で造られ」とあります。碧玉は前回の 11 節に出て来ました。高い山で都全体を見たヨハネのファーストインプレッションとして、都の輝きは最高の宝石に似ていて、透き通った碧玉のようであったとありました。それに対して 18 節では「都は透き通ったガラスに似た純金でできていた」とあります。私たちが知っている純金はこの上なく輝くものであるとは言え、透き通ってはいません。つまりやがての都はこの世のもので表現できるものではなく、私たちの経験を超えた世界であるということです。金のように輝きを放ちつつも、透き通ったガラスのように光を照り返して輝く世界であると。

そして 19～20 節に城壁の土台石があらゆる宝石で飾られていた様子が描かれます。ここに全部で 12 の石が出て来ます。それらは様々な色を放つ宝石のようです。それぞれはどんな色なのか、解説する人によって幾分違いはありますが、この中のいくつかは私たちもその色を思い浮かべることができるものでしょう。2 つ目のサファイアは透き通った青色。第 4 のエメラルドはグリーン、第 5 と第 6 の宝石には「赤」という名が含まれていますから、きっと赤いのでしょう。第 8 の緑柱石も名前からして緑色。第 9 のトパーズは黄色あるいは金色。第 11 の青玉は青色。そして最後の紫水晶は透き通った紫色。このように青・緑・赤・茶・黄・金・紫などの色を放つ宝石類で

す。これはこの都の圧倒されるような美しさ、豪華さ、輝きを象徴するものでしょう。そして何と言ってもこの 12 の宝石で思い起こされるのは大祭司の胸当てです。出エジプト記 28 章 15 節以降に、それをどのように作るのか指示されていますが、その形は正方形で、そこに宝石を 3 つずつ 4 列にはめ込むべきことが命じられています。出エジプト記 28 章 17～21 節：「その中に宝石をはめ込み四列にする。第一列は赤めのう、トパーズ、エメラルド。第二列はトルコ石、サファイア、ダイヤモンド。第三列はヒヤシンス石、めのう、紫水晶。第四列は緑柱石、縞めのう、碧玉。これらが金縁の細工の中にはめ込まれる。これらの宝石はイスラエルの息子たちの名にちなむもので、彼らの名にしたがい十二個でなければならない。それらは印章のように、それぞれに名が彫られ、十二部族を表す。」 黙示録の 12 の宝石のリストと比べると 8 つは全く同じです。残りの 4 つについても、ヨハネのギリシャ語訳によって名前が変わっているが、同じものを指すと述べる学者もいます。とするとこれは何を意味するのでしょうか。今読んだ言葉にあった通り、この 12 の宝石はイスラエル 12 部族を象徴します。大祭司はこの胸当てをつけて年に一度、至聖所に入り、全イスラエルのための罪の贖いをし、主が全イスラエルを象徴する宝石と今、至聖所でもに在るように、そのようにこれからもともにいてくださることを願いました。それがまさにやがての新しいエルサレムにおいて成就することになります。この城壁の土台石には子羊の 12 使徒の名が刻まれていたと前回の 14 節にありました。使徒たちはキリストご自身から任命され、キリストを証しする者たちです。その使徒たちの名が刻まれている土台石がこれらの宝石で飾られていました。あるいはこれらの宝石は土台石にちりばめられるようにしてはめ込まれていた程度ではなく、土台石そのものがこれらの宝石だったと見る人たちもいます。いずれにしてもあの大祭司アロンの胸当てが象徴していた、やがて全イスラエルが至聖所の中で神とともに交わる日が来るという祝福は、使徒の教えに聞き従う者たちに、すなわちキリストご自身により頼む者たちに成就するというを示しているように思われます。キリストに信頼する者たちは、ついにまことの至聖所なる聖なる都の中に入れられ、アロンの胸当ての宝石が象徴していたように、そこでこの上なく光り輝く者たちとなるということでしょう。

最後の 21 節に 12 の門は 12 の真珠であり、どの門もそれぞれ一つの真珠からできていたとあります。先ほど城壁の高さは約 63 メートルほどあると言われましたが、その門が一つの真珠からできているとすると、これはとてつもない大きさの真珠ということになります。現実には考えられないことです。これも象徴として考えるべきで

しょう。真珠は高価なものの象徴として聖書に出て来ます。思い起こすのはマタイの福音書 13 章 45～46 節のイエス様のお言葉です。「天の御国はまた、良い真珠を探している商人のようなものです。高価な真珠を一つ見つけた商人は、行って、持っていた物すべてを売り払い、それを買います。」 言われていることは天の御国は全財産を投げ売って、それらと引き換えにしてでも、私たちが第一に求めるべき最も大切なものであるということです。その天の御国の祝福はイエス様が伝える福音を通して、もっと端的に言えばイエス様ご自身において提供されています。やがての新しいエルサレムの入口である門が真珠であることは、まさにこのイエス様の言葉を思い起こさせるものではないでしょうか。そしてその門を通ると中にある都の大通りは純金で透明なガラスのようであったとあります。ソロモンの神殿も内部に入ると、そこは金でおおわれていました。列王記第一 6 章 30 節：「神殿の床は、奥の間も外の間も金でおおった。」 あのソロモンの神殿が指し示していた神の祝福の世界が、この神の都には真の意味で満ち溢れているということです。しかもそれはこの世にはない、透明なガラスのように光り輝く都です。今日はここまでで、次回の 22 節以降では都の中の生活が語られることとなります。

以上、神がご自身の民に用意くださっている祝福の世界がさらに今日の箇所を示されました。先にも述べた通り、これは単に私たちが将来住む場所を描いているというより、私たち自身を描写するものです。この都が広大な立方体として示されたように、私たちはやがて旧約の至聖所が指し示していた神との直接的で、これ以上ない親しい交わりの世界、祝福の世界に生きる者たちとされます。また神は測り竿でこの都を測られたように、私たちのことをすべて知り、愛し、完全な守りのもとに置いてくださいます。またその神との交わりを通して、私たちは神の光を反映して光り輝く宝石のような者たちとされます。それぞれの宝石がそれぞれの色と特性をもって輝くように、私たちも神の光を受けてそのように光り輝きます。まさにここに子羊の妻として完全に整えられた花嫁なる教会の姿があるのです。

私たちはこの日が必ず来ることを前に見つめて信仰の歩みを続けたいと思います。この栄光と輝きの前には、この世のどんな栄光や輝きも色あせたものとなります。それらは取るに足りないもの、一生懸命追求めるに値しないものとなります。イエス様が言われた良い真珠を探す商人のように、私たちも他のすべてのものを後ろに捨て去っても、この尊いかけがえのない宝を追求める歩みをする者でありたいと思いま

す。神がくださったキリストに信頼して、神が用意くださった素晴らしい最後の祝福に到達する者であるように。使徒たちの教えに聞き従い、やがて新しいエルサレムの土台石において尊い宝石として神の光を照り返して色鮮やかに輝く、この上ない幸いに生きる者たちへ、主にあつて導かれて行く者たちでありたいと思います。